HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	大学生活場面におけるキルギスの日本語学習者の言語状況 : キルギス語とロシア語の選択と使用に着目して
Author(s)	西條, 結人
Citation	日本中央アジア学会報, 16, 36-38
Issue Date	2020-07-31
DOI	10.14943/jacas.16.36
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/88517
Type	article
File Information	JB016_006saijo.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

大学生活場面におけるキルギスの日本語学習者の言語状況
── キルギス語とロシア語の選択と使用に着目して ──

西條　結人

本報告はキルギスの大学に通う日本語学習者の大学生活におけるキルギス語とロシア語の選択と使用という観点から言語状況を明らかにし、日本語教育とのつながりを検討しようとしたものである。

キルギスの日本語学習者数は、「2015年度海外日本語教育機関調査」［国際交流基金 2017］によれば924名となっており、中央アジア諸国（ウズベキスタン、カザフスタン、タジキスタン、トルクメニスタン、キルギス）の中で、ウズベキスタンに次ぐ学習者数となっている。キルギス国内の各教育段階における教授言語に着目すると、初等中等教育機関において、2017−2018年度は国内全体2262機関のうち、約90％の機関でキルギス語、もしくはロシア語、キルギス語とロシア語の2 言語併用で教授されており、児童生徒数全体の122万2661人の87％がキルギス語、ロシア語、またはその両方の教授学校に在籍している［Национальный статистический комитет Кыргызской Республики 2018］。また、初等中等教育機関の所在地によって言語の習得に違いがあることが示唆されている［Korth 2005］。Национальный статистический комитет Кыргызской Республики［2018］によれば、2017−2018年度の高等教育機関における教授言語別の学生比率は全体の学生数16万2406人のうち、ロシア語を教授言語とする学生が66.7％、キルギス語を教授言語とする学生が24.7％であり、高等教育段階においてはロシア語で学ぶ学生が多いことが窺える。したがって、キルギスの日本語学習者は学校や大学生活においてキルギス語とロシア語の2言語に多く接触していることが考えられ、言語状況を明らかにすることは、キルギス人日本語学習者に対する教育方法を考える上で重要であると思われる。

「大学生活における言語選択と言語使用に関する質問紙調査」［西條 2019］は、2018年2月から3月にかけて、ビシケク人文大学東洋国際関係学部、キルギス国立総合大学国際関係学・東洋学部に所属している日本語学習者118名を対象に紙媒体でアンケート調査を実施し、出身教授学校別に分析を行ったものである。教授学校別の内訳についてはキルギス語教授学校出身学生32名、ロシア語教授学校出身学生86名である。調査の結果、キルギス語教授学校

出身学生については、授業外や友人と話す場面でキルギス語を用いる傾向にあり、思考する言語としてキルギス語を使用する学生が顕著であった。一方で、ロシア語学校出身学生は、全体的にロシア語の使用率が高いが、書く場面（メモやノートテイキング）においてロシア語を使用する傾向にあることが明らかとなっている。

得られた知見を日本語教育という観点から見れば、日本語教員養成と学習者談話（作文・スピーチ）に関する評価の2つの観点について有用であると考えられる。

第1は、日本語教員養成において日本語教師として求められる知識・能力に関する点である。文化審議会国語分科会［2019］では「海外に赴く日本語教師【初任】に求められる資質・能力」を示されている。その中で、海外日本語教師が初任の段階で持っておくべき知識として「赴任国・地域等で用いられる言語の知識及び言語と日本語との言語学的対照に関する一般的な知識をもっている」ことと記載されている。海外に赴任する日本語教師にとっては、日本語学習者の母語での論理構造を把握すること、派遣国の言語状況を把握しておくことは重要であることが考えられる。

第2は、日本語教師による学習者談話（作文・スピーチ）に対する評価についてである。長谷川・堤［2012］は大学の日本語教育現場において、日本語学習者の作文は、構成面が評価される傾向にあり、評価者の母語の枠組みに当てはまらないものは低く評価される傾向があることを示唆している。作文やスピーチの原稿を書くことに関する指導を行う日本語教師は、学習者がいかなる言語の枠組みや論理構造を用いるのかに留意が必要であり、学習者の母語での言語状況を理解した上で指導することでより学習効果が高まると思われる。

本報告では、大学生活場面において日本語学習者がキルギス語とロシア語のどちらを選択し、使用しているのかに着目し、調査の知見を日本語教育においてどのように生かすことができるかについて論じてきた。今後の課題としては、キルギス語母語話者、ロシア語母語話者、キルギス語・ロシア語バイリンガルの日本語学習環境を含む日本語習得過程及び日本語学習の際にどの言語の枠組みを用いるのかを検証する必要がある。それらの知見を踏まえ、キルギス以外の中央アジア諸国とも比較をしながら、より詳細に分析を行う必要がある。

参考文献

Korth, Britta. 2005. *Language Attitudes Towards Kyrgyz and Russian; Discourse, Education and Policy in Post-Soviet Kyrgyzstan*, Bern: Peter Lang.

Национальный статистический комитет Кыргызской Республики. 2018. *Статистический сборник: Образование и наука в Кыргызской Республике*, Национальный статистический комитет Кыргызской Республики, http://www.stat.kg/media/publicationarchive/96f08785-4102-4037-9650-bfe7315eaa68.pdf、閲覧日：2020年3月22日。

国際交流基金 2017『海外の日本語教育の現状――2015年度日本語教育機関調査より――』、https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey_2015/all.pdf、閲覧日：2020年11月26日。

西條結人 2019「多民族・多言語社会における言語選択と使用に関する社会言語学的研究――キルギスの大学生を対象とした調査の結果から――」『語文と教育』33、90–78頁。

長谷川哲子、堤良一 2012「意見文の分かりやすさを決めるのは何か？――大学教員による作文評価を通じて――」『関西学院大学日本語教育センター紀要』創刊号、7–18頁。

文化審議会国語分科会 2019『日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改定版』、https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/kokugo/kokugo_70/pdf/r1414272_04.pdf、閲覧日：2020年3月22日。

（四国大学全学共通教育センター）